

観光まちづくりに関する研究

(研究期間：平成 28 年度～平成 30 年度)



都市研究部 都市施設研究室 主任研究官 吉田 純土 室長 新階 寛恭

(キーワード) 観光まちづくり、歩行空間、可照時間、朝型

1. はじめに

政府目標として2020 年までに訪日外国人旅行者数を現在のほぼ2倍にあたる4000 万人とすることが掲げられる中、現状においても、一部の地域・季節においては観光関係のインフラ（交通施設、宿泊施設、文化施設等）のサービス需給が逼迫している現状がある。本研究においては、このような現状を踏まえ、観光産業を支える交通インフラ等のピーク時の負荷を軽減させるための「朝型観光」について検討した。

2. 我が国の標準時刻の特徴

我が国においては1872年に定時法が導入されて以降、基本的に観光行動を含め社会活動の多くが、太陽の位置ではなく、時計が示す時刻に応じて営まれている。しかしながら国土が標準時刻子午線経度の東寄りに位置することから、日出から社会活動が始まるまでの時間が長い。ここで、「経度モーメント」を以下のように定義し、各国の状況を比較すると我が国の特異さが明白になる。（表参照）

$$\bar{M} = \frac{\iint_A R(\cos\phi)\lambda \cdot R d\phi \cdot R \cos\phi d\lambda}{\iint_A R^2 \cos\phi d\lambda d\phi} = \frac{\iint_A R \cos^2\phi d\lambda d\phi}{\iint_A \cos\phi d\lambda d\phi}$$

ここで、

- \bar{M} : 経度モーメント
- ϕ : 緯度
- R : 地球半径
- A : 対象範囲 (国土)
- λ : 標準時刻子午線経度からの経度差

表 各国の経度モーメント

国名	経度モーメント [km]	【参考】外国人旅行者受入数 [万人](2014年)※観光白書より
スペイン	1543.4	6,500
中国	1488.6	5,562
フランス	949.1	8,370
韓国	663.7	1,420
米国	363.0	7,476
イタリア	268.2	4,858
日本	-230.1	1,341

3. 観光施設の営業時間と可照時間

観光活動の多くが可照時間内に多く行われることを踏まえると、日出・日没の時刻が早くなるような標準時刻設定は、観光産業の国際競争力の低下を招いている恐れがある。図に示すとおり、各国の可照時間と観光施設の営業時刻を見ると、日出から営業開始時刻までの時間に関して、我が国は諸外国と比較して長く、観光活動が制約されている可能性があることが分かる。また、特に混雑が著しい観光地においては、日出直後の時間帯へ観光需要を誘導し、ピークを平準化することも重要である。これらに対応するためには、交通・観光施設の管理者、宿泊業者等の関係者全体が朝型観光に協力する必要がある。

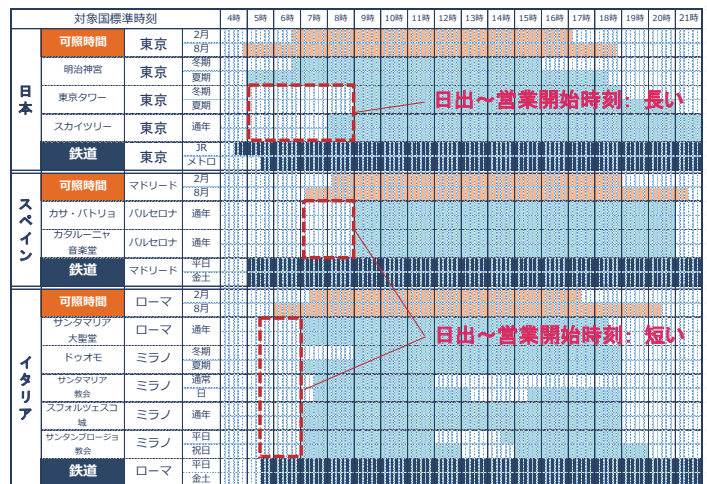


図 可照時間と観光施設の営業時刻

4. 今後の予定

今後、本研究においては朝型観光実施時の経済効果分析、観光客の歩行経路の誘導による「まち」の活性化方策の検討等について取り組む予定である。

☞ 詳細情報はこちら

1) 第55回土木計画学研究・講演集 vol.55 No.06-08「観光客の行動時間の分散化による観光需要の平準化に関する一考察」